

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

NO. 12

目 次

中国民族舞踊と稲作文化（２）	前雲南省舞蹈家協会常務副主席	劉 金吾
----------------	----------------	------



二 稲作文化中の祭祀舞踊（続き）

５． イ族の老虎笙と大鑼笙（続き）	2
６． ハニ族のクザザと鉦鼓舞	4
７． ペー族の盛大な祭典——繞山林	5

自然人アイヌ	
こころの歌と踊り	アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎

平成 15 年度黨民族舞踊文化財団活動予定	11
-----------------------	----

中国民族舞蹈と稲作文化（2）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席

劉 金吾

二 稲作文化中の祭祀舞蹈（続き）

5. イ族の老虎笙と大鑼笙（続き）

麦地冲の老人達は語る。「我々ロロ人は代々ただひたすら老虎舞（虎の踊り）を踊り、老虎節を迎えて、しだいに家族も増え、家畜も繁殖して作物もよくとれるようになった。

虎はイ族のトーテムであり、イ族は虎を祖先と見なして自らを虎の子孫だと自認していた。老虎節は実際は祖先の神霊に対する祭祀であり、祖先の霊の加護を祈るものだった。正月は「虎の月」と呼ばれ、冬眠していた動植物のほとんどがこの頃に目覚めるとされた。また、雲南のある地区では正月は種まきの季節とされ、「虎の月」は「種まき月」とも呼ばれ、甚だしくは「正月が虎の月でなければ穀物は熟さない」とまで言われた。これらのことから老虎節が正月におこなわれる理由や、老虎笙と稲の生産との関係が見えてくる。すなわち、イ族は彼らの虎の祖先が生存して繁殖するのを心から感激し、虎の祖先に対して五穀の成長と家畜の増殖への加護を祈ったのである。

大鑼笙（大銅鑼踊り）

毎年旧暦の6月24日に雲南のイ族、ペー族、リス族、プミ族、ナシ族等は皆松明（タイマツ）祭りをする。穀物の成熟する6月に、人々は「火が稲穂を伸ばし」、「火が虫を殺し苗を保護し」、「火が邪気をはらい無事と健康をもたらす」等、天神の加護を祈った。この祭りは明らかに稲の豊作のための祭祀活動に属するものである。

祭りの期間中、各集落では七～八丈の高さの松明木を用意する。木の上部には赤、緑などの色とりどりの旗を掛け、“五穀豊穡”“六畜興旺”等の縁起のよいことばを書く。ペー族の大松明木の上部にはさらに升（杓・マス）が掛けてあり、“升”の読みが“生”と同様なので子供のできない夫婦はこの木に向かって子宝を授かるように祈る。“生”はまた、稲や雑穀の「生」でもあるのでその関係から穀物がよく育ち、豊作になるようにとも祈られる。松明木を囲んでの乱舞の他に村人が各々小松明を持って田のまわりを巡り、家の前後や門の背後等の家の隅や家畜の柵の前で松脂（まつやに）を松明の上にまく。そのとき飛び散った火花が邪悪なものを駆除する。実際にこの地方でよくはびこる細菌を殺してしまう。老人達は子供たちの後ろのお尻の下に火をかざし、松脂をまきながら「早く大きくなれ、早く大きくなれ」と唱える。



イ族の老虎舞

者柯哨の松明祭りは他の地区に比べ盛大で厳かに行われる。祭りの期間が長い（6月24日から29日まで）だけでなく、祭祀の手順も詳細に定められ、儀礼は行き届いており、それはあらゆる神霊（天神、地神、山神、祖先神、火の神、家の神）が招請され、気候が順調で五穀豊穡、六畜興旺、老人や子供の平安、衣食の充足等への加護が祈られるばかりでなく、それ以外にも歴史の移り変わり（移動の歴史）の知識教育や稲、トウモロコシ、豆、そば等およそあらゆる栽培可能な植物の生産知識の伝授、そして豚、ニワトリ、牛、羊、犬等飼育可能な家畜類の飼育経験の伝達等から倫理や道德の教育、すなわち人として何をすべきか、悪事を働いたらどのように改めるか…等にまで及んでいた。さらに祭祀の儀式中にはずっと大鑼篳が踊られ、神降ろしのときも、神送りのときも、各々の家で祓いをするときにも踊りが続けられる。知識の伝授の際にも象徴的なシミュレーションで、イメージに富んだ生き生きとした教育が行われる。

松明祭りの祭礼次第は下記の通り：

6月24日、各戸から男子が一人ずつ出て殺牛山に到り、ビモ（畢摩：イ族の司祭）や民族の長老たちは祭壇を設け、経を読み、牛の引き比べ、皆で一緒に会食する、その意は皆で心をつにしてこの祭りの一切を成し遂げる。家に残った人々は家屋や庭を掃除する。総じて言えばこれらは神を迎える準備のための仕事である。

6月25日、各集落で点火された松明が者柯哨の峠に集められ、火の神を迎える。それと同時に大鑼篳が踊られる。家々のあいさつを受けて鑼篳の踊り手がひとしきり舞った後、部族長が手にさげた鉄の鎖をそれぞれの家の中で振り動かす。邪悪なものを追い払っているのである。村の中を踊りながらひとめぐりした後、田のまわりでも踊りがくりひろげられ、神霊の加護による穀物の順調な生育と虫害や悪疫の防除を祈る。



イ族の松明踊り

6月27日の夜、者柯哨で大松明の木が切られ、人々が小松明を持って大松明の木のまわりで大鑼篳を踊る。松明の木が燃え尽きるまで踊った後、鑼篳の踊り手は村の中に入って各家を祝賀する。

6月28日、すべての人が者柯哨の後ろの山稜の峠の籐の野外舞台に集まり12場の大鑼篳を踊る。それと同時にビモが古歌を夜中まで吟じる。各集落から運ばれた竹かごなどの日用品が積み上げられ、燃やされる。天神や地神の仮装をした者からも面や草衣がはずされ火にくべられる。そのように送られて神が帰山する。28日の午後3時以降には傘もさせず帽子もかぶってはならない。それは心から降雨を願うためである。

6月29日、再び祭祀のある山に行き羊を殺して祀り、関連事項を取り決める。そしてこの年の松明祭りの終了が告げられる。

25日から28日までの間、鑼篳の踊り手たちは村の中のすべての家をまわって祝賀する。さまざまな祈祷、歴史の知識、稲作の知識、家畜の飼育経験、倫理道德等の教育や伝授がこの期間になされる。これらの知識の伝授はかなり詳細なものである。例えばトウモロコシを植えるときの説明では、穴掘り、種まき、苗の成長、梱包、収穫の各過程を語るだけでなく、トウモロコシを包むときは絹糸のようになるとか、トウモロコシの種は山に住むニワトリの喙のうのようなのが良いとか、収穫のときにはとれた粒も捨てずに一緒に回収するという類。また羊の飼育につい

て、子羊は出生後餌で育てるとまた子羊を生み、一匹が二匹、二匹が四匹、四匹が八匹というようにどんどん増える。羊の群を放牧するとき、親玉の羊をうまくコントロールすればその他の羊はゴキブリのようにぞろぞろついてくる等々。

伝説によればこの地区の松明祭りは一人の美しいニス（尼蘇）の少女を祀ったものだという。この少女はニスの人々を救うため勇敢に火の中に飛び込み、後にカササギとなって天に向かい飛び去って行ったという。長い間に伝説は変形され、カササギはイ族ニス系支族のトーテムの崇拝物のカササギ神となった。少女もまた火中で幻となり、火の神に変わっていった。少女はニスの人々を救い、自らはニスの祖先神となったのである。松明祭りとはすなわち、祖先神のカササギをはじめとする諸神に加護を祈る祭祀に他ならない。

6. ハニ族のクザザ（苦扎扎：夏の松明祭り）と鉦鼓舞

農歴の6月、ハニ族の山村で主要な農作業がひととおり終わり、田には早苗が緑色を示す頃、人々は“クザザ”（訳注）の祭りを迎える。牛やブタが殺されて祖先や天神“アポウツィ”に捧げられ、村人や家畜の無事、食料の豊作への天神の加護が祈られる。伝説によると天神“アポウツィ”は毎年田植えがすべて終わった後に一頭のきらきらと輝く白馬に乗って地上に降り立ち、山村を巡回し、人や家畜の安否や、穀物の成長の様子、また人々が幸福な日々を過ごしているか等を調べてまわる。また、はるか昔の言い伝えによれば、ハニ族の祖先は田に水を引き耕すことを学んだ後に広大な荒地を開墾し、土中のミミズやアリ、ヘビ、そして林の中に住むクマやイノシシ、キツネ等の生活環境を破壊した。そのためこれらの動物たちは連合して立ち上がり、ハニ族の農作物をふみ荒らしたり、その一方では天神にハニ族の行状を訴えたりした。天上のひとりの豊（ろう）の神が次のように決めた。毎年稲が花をつけるときにハニ族の青年の男子をひとり殺し、その男子の首を荒地の開墾で死んだ動物たちの霊に捧げよ、と……。数多くのハニ族の青年が祭祀のいけにえとして殺され、村にはこれらの好青年の死を悼んで泣き叫ぶ声が満ち満ちていた。村人たちの鳴き声は天宮の庭にまで届き、天神“アポウツィ”（あるハニ語では“モミ”）を大変驚かせた。



紅河州のハニ族のブランコ

そこで天神は下界に降りて事情を調べた後で豊の神の審判を改正することにした。天神は動物たちに告げた。

「ハニ人はおまえたちの仲間の命を幾千も幾万も奪った。しかし彼らはたったひとりの青年しかおまえたちに供えない。彼らにとってはまったく安上がりなことだ。そこで今後は毎年6月の“クザザ”の祭りの時にすべてのハニ人を空中に吊るしてじわじわと餓死させよう。」野獣たちはそれが天神の計略とも知らず手をたたいて喜んだ。天神は今度はハニ人に人を殺した首ではなく、殺した牛の首を祭祀に供えるように命じ、また祭祀の場には誰かが乗った時に空中に吊り上げられたように見える高々とした「ブランコ」（モーチュエ）を据え付けるように指示した。

祭りの初日に各集落では井戸から水を汲み上げ、準備したその最も清潔な水（若水）で天神と祖先を迎える。高山の山上から一本の真っ直ぐに伸びた松の木を切り出し、「ブランコの間」にブランコを立てる木として据え付け、栗の木や藤のツルを使ってブランコを組み立てる。二日目には家ごとに室内に松の葉をしきつめ祖先にそこでひと休みしてもらふ。三日目からは人々は次々と「ブランコの間」に押し寄せ、ブランコに乗ったりそれをこいだりする。鉦鼓舞やシュロ舞を踊ってにぎやかなことこの上もない。最後の日の午後、太陽が山に隠れた後、家々は松明に火をともし、屋内を一巡する。松明の火によって災いやたたりを一掃するのである。その後で栗の木の枝をさして並べ、松明を栗の棒の根もとにおいて天神を送り出す。栗の木の枝が馬の鞭の役割をして、松明の火が天神の帰る道を照らす。午後、各家々では番に当たった男子が酒肴をブランコの間へ運び会食し、生産に関する経験をまとめ、その上に糧食の豊作をもたらすための計画を相談する。こうして松明祭りは終了する。

「クザザ」祭りの鉦鼓舞は一般的な舞踊に興じるのではなく祭祀の内容の方が重要部分であり、それは鮮明に稲作の時代の色彩を帯びている。鉦は稲の粒が大きいことを意味し、鼓は稲が満ち満ちている様を象徴している。祭りのときには村中の男子は先を争って鉦鼓舞を踊る。人々は言う。「踊りがうまい者、上手に太鼓をたたく者の家は作物がよく成長し、稲穂もより多くの実をつける。」それ故に人々は鉦鼓舞を踊るときに大きな稲粒がたくさんついて豊作になるように天神や祖先に敬虔な祈りを捧げようと思うのである。

訳注 クザザ（苦扎扎）： 漢語で6月年と訳される。祭りの期間にブランコをたてて神々を迎え、松明の火で厄病を払い、水田の稲を照らし、稲の火中出産を迎えるための田巡りの行事を行う。（曾紅氏：後掲書）

7. ペー族の盛大な祭典——繞山林

“繞山林（ラオサンリン）”は又の名を“繞桑林”、“繞三霊”とも言う。文献の記載するところによれば、“桑林”、“桑社”とは我が国の古代社会の氏族のメンバーの集会の形式のことである。古代社会の氏族のメンバーは常に松、柏、栗、ヤマグワ、エンジュ、桑等の木の枝でその土地の氏族社会を代表させていた。これらの木の枝は土地神や土地神を祭る場所の象徴だったのである。桑社集会の時には各自の祈祷師達によってとり行われた。その様は現在のペー族の繞山林の祭りの時に人々が神樹に従って行進し、郷野に向かって歌いかける風俗にほぼ等しいものであったであろう。中原（中国の中心部）文化の変化、発展に伴い、“社”（土地神を祭る場所）の形式は多くの民族で消失したが、農耕文化が圧倒的であった大理地方の蒼山、洱海の間に“社”で祭りをする、風雨の順調なことを祈る古風な形式がペー族の本主文化の中で保存されていた……。（註1）

ペー族は洱海を中心として発展してきた民族で、およそ四千年前の賓川白羊村の遺跡の洞穴の中からは炭化した稲もみやその燃えかすが発見されている。劍川が洱海にそそぐ河口の遺跡でもやはり炭化した稲が発見されている。



繞山林

そのため大理地区はアジアで最も早く水稻栽培を始めた源流地であるという人もいる。ある学者はさらに一步踏み込んで「洱海区域の住人はすでに新石器時代にそこに定住していた農耕民族であり、我が国の長江以南の“稲作民族”である。」と説く。過去においては水稻を植えるに際しては雨水に対する渴望が非常に強かった。

その年が豊作になるか否かは田植えの時期に天の神様が雨を降らせてくれるかどうかにかかっていた。雨水が田植えを保証するものである以上、人々はひたすら神靈に祈らざるを得なかった。ペー族の人達から見れば、本主とは風雨をコントロールする超自然力を身につけた存在であり、しかも降雨はその機能の最たるものであった。繞山林とはすなわちペー族の各集落が“桑社”の形式で歌ったり踊ったりしながら本主を祭り雨乞いをする盛大な祭典なのである。

繞山林は毎年旧暦の4月23日から25日にかけて行われる。その時村では列を作り、二人の長老が一本の柳の木を支えて道案内をつとめる。柳の木の上にはヒョウタンがかけられ、長老のもう一方の手はヤクの尻尾をつかんでいる。長老は踊りながら花柳の曲を唱え、行進する。笛の伴奏者がそのすぐ後ろにぴったりとつき、その後には笛の音に合わせた舞蹈の霸王鞭、八角鼓

(写真参照)、双飛雁を舞う踊り手の列。そして最後に葉っぱの伴奏の下に手に草帽を持ったり、扇子で顔を半分かくしたりしてペー族調で歌う数十人のしんがりの女性隊が続く。第一日目に本村の本主廟を出発し、蒼山の麓から五台峰にある聖源寺(俗称“神都”)まで練り歩き、風雨の順調と人々の長命、今年の豊作を祈る。一日中線香の火を絶やさず、同時に夜を徹して歌のかけ合いや踊りが続けられる。二日目には人々は長蛇の列をなして歌や踊りに打ち興じつつ洱海のほとりの金亀寺(俗称“仙都”)に到る。三日目には洱海に沿って大理三塔のそばのマチュイ本主廟まで、祈ったり歌ったり踊ったりして楽しみを尽くしてから解散する。

繞山林は稲作農耕の雨乞いの祭典に属していて、各集落の祭列を引率する長老は必ず何か物品が必要であることがわかる。二人の長老は一本の柳の木を支えて持っている。それはペー族の村社の祭りの木であり、本村の本主の神樹を代表するものでもあった。人々はその柳の木を掲げて本村の本主廟を出発し、聖源寺に至りそこで木の枝を神都に供える。この“百神上朝”と呼ばれる儀式は、すなわち多くの小本主が神都の大本主のもとに参拝し、大本主が適切な時期に雨を降らせてくれるように祈るものであるが、祭典は厳粛なものである。それと同時に、柳の木は根が生じやすく発芽もしやすいので穀物の成長をも象徴している。さらに神樹の上にかけたヒョウタンも穀物が速やかに成長する様を意味するものといわれる。というのもヒョウタンもまた成長が早く、たくさん実をつける植物なので多くの民族がヒョウタンから人が生じたという伝説をもっている。二人の長老が持つヤクの尻尾は稲作農耕での牛の重要性を表現したものと説明され、牛に対する祭礼は、ペー族地区では遥か昔から“二牛三夫”(3人で2頭の牛をあやつる)という耕作方法があり、その当時は先進的な耕作方法だった。何故ヤクの尻尾を用いるのかということについてはペー族は氏羌語族に属していることと関連があり、元々は西北高原の氏羌語族のなごりであると考えられる。最も特別な点では、繞山林に参加する男女は皆彩色した布



ペー族の踊り「八角鼓と霸王鞭」

や色紙を太陽に似せて銅錢ほどの大きさに切り抜き（太陽膏とよばれる）、それらを額の両側に貼り付ける。これは太陽神への祭礼に他ならない。すなわち、稲作生産に即していえば雨水の他に太陽の光も穀物生産の豊作をもたらすためには重要な条件になるのである。

祭りの間は昼夜を問わず歌や踊りが続けられるが、これらは祭祀典礼中には神を迎え、神をもてなし、神を送るための重要な手段である。たいへんにぎやかな歌や踊りは神霊に対する拝礼と祈祷が敬虔で厳かに行われているがこれは神霊の歓心を得て恩恵を施してもらうためのものである。当然のことであるが、社会の発展につれて繞山林の内容は変化し、神を楽しませることから多くの場合人を楽しませることに移ってゆく。このため繞山林はペー族の人々が春の忙しい農作業の前の野原での大饗宴となり、人々が強靱な体と心地よい精神で春の農作業に励めるような調節機能をもち、また春の野遊びの性格を帯びた祭りになっているのである。

註① 楊政業著《白族本主文化》、雲南人民出版社 1994 年版

翻訳： 黛民族舞踊文化財団 藤原明人

参考文献

星野紘『歌垣と反閨の民族誌』創樹社、1996 年

諏訪春雄『東アジアの神と祭り』雄山閣出版、1998 年

（曾紅「ハニ族の年中行事」）

欠端實『聖樹と稻魂－ハニの文化と日本の文化－』近代文芸社、1996 年

横山廣子『大理の三月節』（季刊民族学 48 号）（財）千里文化財団、1989 年

鎌澤久也『白族の聖地巡礼』（季刊民族学 51 号）（財）千里文化財団、1990 年

自然人 アイヌ

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第9回

「アイヌ」とは、人間をさす言葉である。

このような自称は、なにもアイヌ民族に限ったことではなく、世界の各地域に居住している原住民（または先住民）といわれている人々も、「自分は人間である」と言っている。

自分達は人間と称する源（みなもと）は、アイヌの場合どのような理由で何に対していうのであろう。

ごく普通に考えると、人類も分類学上は動物の仲間であるから、例えば熊とか鹿などの獣（けもの）や馬、牛など畜類とは区別して、自分自身は人間であると言っているのではないかと思われるが、決してそうではない。

アイヌは「カムイ」すなわち神に対して、「われわれは人間である」と宣言しているのである。

古代の人々は、日常生活のまわりにおこるさまざまな不可思議な現象を、自分たちの生活体験だけでは説明できなかつたし、考えてもその奥底をどうしても知り得なかつた。

そこで、それを超自然的な計り知れないものがひきおこすと考えて、その偉大な力を神のなせる仕業（しわざ）と感じたのである。

アイヌは暮しの中で、いつも神を意識して交信を怠（おこた）らない。

人間に莫大な利益を与えてくれる神々と真剣に対峙して、畏敬の念をもって心からの儀礼で処遇し、その見返りとして神からの贈り物がある。

アイヌのものの考え方では、カムイ（神）は絶大な力をもっているが、人間が敬（うやま）わなければその尊敬は損（そこ）なわれる。

カムイは人間に利益を与え助けてくれてこそ崇拝され、それに対して人間は、常日頃カムイに感謝の祈りを捧げることによって、恩恵を受けることができる。

このように、人間に敬拝されて神の威厳が保たれ、神を厚く処遇することによって人間界に恵みがもたらされる、という相関関係が成り立つのである。

アイヌ民族の信仰は自然崇拝であるから、人物神とか偶像を崇拝する習慣はない。

大宇宙をつかさどる神々は、太



水神様の祀り（ワッカウシ カムイノミ）

陽神をはじめとして月や星座、風、雷神など。地球上では国土神、山岳、海、湖沼、滝の神。生物では動物、鳥類、魚類、樹木にも数々の神が存在する。

人間の中で最も身近にいる神は火の神であり、家屋に宿る神や、日頃汲んでいる湧水のある場所にも神の名がつけられている。

前回までは、祭事のときに奉納する歌舞について書きましたが、これからは娯楽舞踊に関して述べることにしましょう。

行事の奉納舞踊をひととおり終えると、次は余興にはいり各々が自慢の歌や踊りを披露する。一人でやることもあれば、何人か組で、あるいはその場に集まっている全員が参加して踊る場合もある。

娯楽というのは、人の心を楽しませたり、慰めるもの、また各自や仲間達で楽しむことである。しかし、アイヌの娯楽舞踊というのは、ただ自分達だけが楽しむというのではなく、神々と人間が共に楽しむ宴（うたげ）なのである。



大規模な畑作地帯 十勝平野(北海道)

古い時代のアイヌ民族は、主に山野で狩猟をして、海川、湖沼で漁労をおこない、里山（さとやま）では山菜、果実など採集して、日々の食生活を賄（まかな）ってきた。

だが百八十年ほど以前から、蝦夷（えぞ）地のアイヌにも焼畑農法が伝わり一部の地域では農耕を始めるようになった。

初歩的な農作であったから、手数のかからない容易に作付けできるジャガイモを主体に、カボチャ、粟（あわ）、稗（ひえ）、麦、蕎麦（そば）など栽培した。

娯楽舞踊 (1) 種まきの歌舞

シツチョイ　　チョイナー

sitciy ciyi　　ciyi na .

イホレーワ　　イホホ　　イホレワオー

ihore-wa　　ihoho　　ihorewaoー

イホレー　　イホホ　　イホレワオー

ihoreー　　ihoho　　ihorewaoー

イホレーワ　　イホホ　　イホレワオー

ihore-wa　　ihoho　　ihorewaoー

(全部 かけ声)

——互いにかけ合い　くり返して歌う——

古い時代の踊りは、大地に種をまき土をかけながら、心の中では豊作を祈り農作業をするという単純な内容のものであったが、後世になって収穫をして、その実りのもので団子をつくったり、喜びの踊りをする振り付けが加えられた。

「種まきの踊り」は最初、数人またはそれ以上の踊り手が横一列に並び、左手を腰に当てて上半身を少し前に屈（かが）め、右手で粟か稗の種子をもつようにかまえる。

歌がはじまると、それに合わせて両膝を曲直させ拍子を取りながら、種を落とすように踊る。

次に、両手を腰に当て左足を軸に立ち、右足で蒔いた種の上に土をかける動作にうつる。

やがて稔りの秋がきて、豊かに実をつけた穂を刈りとり、収穫した粟で団子をつくる。

最後は、五穀の神へ感謝の供え物をして、「今年も豊年、うれしいなあー!!」「神様ほんとに有難う—————」と、両手を合わせ叩きながら全身を左右に振って喜びをあらわす。

種を蒔く、土をかける、穂を刈り取る時の踊り手たちの様子は、真剣な表情で農作業をしている雰囲気であるが、おしまいの五穀の神への感謝の踊りに入ると、一同がいかに嬉しそうな笑顔で心から豊穰を祝う。

この「種まきの踊り」の発祥地は、帯広市が中核をなしている十勝（とち）地方であると伝えられている。

広大な十勝平野には、明治時代にはいると本州から和人の開拓団が入植し、苦労して原野や森林を伐り拓き田畑を耕した。

現在ではジャガイモやビート（砂糖大根）、トウモロコシ、各種豆類などの生産で農業大国を誇っている。



種まきの踊り



基諾族（ジノー族）博物館にて

平成15年度黛民族舞踊文化財団活動予定

6月3日（火）黛民族舞踊文化財団総会

6月13日（金）～6月17日（火）韓国・水原演劇祭公演に参加

7月4日（金）～7月6日（日）韓国・釜山夏の舞踊祝祭公演に参加

6月8日（日）国際舞踊祭（赤坂区民センター）公演に黛民族舞踊団参加

9月11日（木）～9月22日（月）

第10次雲南省舞蹈家協会訪日代表团来日

訪日代表团交流会日程

9月13日（土）群馬県新田町文化会館エアリスホール

9月15日（月）新潟県柏崎市市民会館

9月17日（水）長野県松本市林友渚カナディアンホール

9月19日（金）八王子市パルテノン多摩

9月21日（日）学習院百周年記念会館

10月4日（土）国際舞踊祭（赤坂区民センター）公演に黛民族舞踊団参加

編集後記

舞踊文化 E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をお待ちします

平成15年6月3日 財団法人 黛民族舞踊文化財団

港区赤坂3-10-3 電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639